

稲作

土づくりを起点とした基本技術の励行を

令和8年産の稲作が始まりました。今年も高温傾向と予報されています。基本技術を確実に実施し、高温などの気象への対応策を万全としましょう。

乾田化促進

春先に土壌が乾きにくい場合、異常還元が早期に発生しやすくなり、生育に影響してしまいます。土中の未熟有機物が多いと気温上昇とともに分解が始まり、ガス発生や土中が酸欠状態となり稲の生育に影響を及ぼします。今年も前年のワラが多く、高温が予報されているため、異常還元(ワキ)が田植えと同時に発生する危険性が高まっています。まずは、ほ場の停滞水は速やかに排水させ、機械がある場合は耕起前にサブソイラで透水性向上を図り、乾田化を促進させます。

田植え直後から、土中のガス抜きと酸素供給のための飽水管理や水の入れ替えが必要です。

健苗育成

健苗を田植えすることで、低温や除草剤に負けずに素早い活着と初期分けつが確保されやすくなります。今年も気温は高いと予報されていますので、苗焼けに注意してください。苗は寒さより暑さに弱いです。苗立枯病やみ枯細菌苗は、ハウス内が高温で蒸れると発生しやすくなります。早い時期から積極的にハウスを開放して換気、温度管理を徹底しましょう。田植え前には追肥を必ず行い、素早い活着を促します。

ケイ酸投入

ケイ酸は登熟歩合向上だけでなく高温や低温、日照不足でも根や穂体の活力維持に役立ちます。高温対策にケイ酸は不可欠です。管内土壌はまだまだケイ酸が不足しているため、再び猛暑となった場合、以前のような被害が発生しかねません。今こそ土壌にケイ酸を再投資し、高温でも収量・品質の高位安定化を図りましょう。

「根」を意識した耕起・代かき

耕起は固く締まった土をほぐし、碎土率を上げすぎず土塊が残る程度とすることで、土塊のすき間に酸素が入りやすくなるため根の伸長に効果的です。耕深は15cmを目標として、根域を確保します。

代かきは、浅水で行い、ワラや雑草種子、肥料殻を土中に埋め込みます。下層では土塊による隙間を残しながら、上層を均平にします。「根」の活力維持を意識した土づくりを心がけましょう。

豊作へのスタートダッシュは 土づくり+健苗育成

異常還元が発生しにくい環境を作る
暑さへの対策は春のうちから
根っこの元気は土中のスキマポイント

揃った生育は丁寧な浸種・催芽から
過保護にせず早くから外気に慣らせる
育苗期追肥で寒さに負けずすぐに活着できる苗



このページは秋田県農業共済組合との共同発行です。

健苗育成が高品質米づくりの第一歩

田植え後、素早く活着し初期生育のスタートダッシュを切るためには、健苗育成が欠かせません。目標とする苗質を確認して、健康で元気な苗となるように管理をしてください。

無加温出芽で被覆物(ベタ張り)除去後や育苗器から出芽苗をハウスに並べた後は、覆土の持ち上がりや落とす程度のかん水をします。ハウスへの苗並べが夕方の場合は、翌朝にかん水します。また、露出した種籾があったら見えなくなる程度に覆土します。

育苗期間はかん水温度と床土温度の差が少ない日の出から午前10時頃までの間にたっぷりかん水します。夕方に行くと床土温度を下げるうえ、過湿になるため控えます。温度差によるストレスを与えないようにします。

出芽後の苗は極端な温度差にも弱く、当日の天気予報を確認しながらハウス内の温度管理を徹底してください。日中は本田作業等でハウス管理が難しい場合は、朝から開放管理としてください。

種類	稚苗	中苗	密播・密苗
育苗期間	20~25日	35~40日	14~21日
葉数	2.5葉	3.5葉	2.3葉
草丈	10~13cm	13~15cm	10~15cm
必要箱数(10aあたり)	70株……19箱 60株……16箱 50株……14箱	70株……22箱 60株……19箱 50株……16箱	70株……8箱 60株……7箱 50株……6箱
播種量	乾籾:144g/箱 催芽籾:172g/箱	乾籾:80g/箱 催芽籾:96g/箱	乾籾:300g/箱 催芽籾:360g/箱
出芽	無加温出芽(ベタ置き)の場合 週間天気予報を確認し、気温傾向に合わせた適切な被覆資材を選択すること。床土温度30℃を超えないように温度管理を。		
	加温出芽の場合 出芽長を伸ばしすぎないように。出芽長が長いとその後の生育も徒長気味になりやすくなります。蒸気出芽の場合、水槽の水が無くなるように確認を。		
第1葉鞘長	3.0~3.5cm	2.5cm程度	4.0~5.0cm
緑化期 ※中苗は播種後20日間	昼:20~25℃		
	夜間:10~12℃	夜間:5℃以上	夜間:12℃以上
かん水のポイント	苗が若いうちは、体が小さく、水を吸う力も弱いため過剰なかん水は避けること。多湿になると酸欠になり、立枯病を誘発させてしまう。苗の大きさに合わせて朝イチにしっかりとかん水させること。		
硬化期 ※田植え1週間前後から	昼:開放		
	夜間:5℃以上	夜間:10℃以上	
追肥	追肥をしっかり行い、元気な苗を植えましょう。		
苗姿の目安	<p>稚苗(2.5葉)</p>	<p>中苗(3.5葉)</p>	<p>密播・密苗</p>

農薬の適正使用と適正処分をお願いします

- ・誤使用を防ぐため使用前に必ずラベルを確認しましょう。
- ・農薬飛散(ドリフト)が無いように天気や散布ほ場周辺作物の確認をしましょう。
- ・農薬使用時は作業に適した保護具を着用しましょう。
- ・農薬は使い切りを基本とします。
- ・散布器具を洗浄し、洗浄液が水系に流出しないようにしましょう。
- ・農薬使用に関して不安な点がありましたら、使用前に関係機関へお問合せください。



NOSAI から 農機具共済 稼働前に点検と加入でゆとりの農作業を…

《春期》加入運動実施中!

- 1台当たり3,000万円まで加入OK!
- 買い替え報告は忘れなく。

※詳しくはNOSAI秋田県南支所資産課 TEL.0187-66-9112



「蒸れ」は万病のもと

育苗ハウスに入って、ムツとするような温度、湿度であれば開放管理とします。強風時でも、風下側を少しだけ開けるなど工夫をして換気しましょう。



育苗箱に設置する温度計はアナログでもデジタルでも構いません。「30℃を超えそうだったらハウスを開ける」目安になります。

育苗後、緑化期までは急激な温度上昇による「焼け」に注意をしてください。無加温出芽で被覆物(ベタ張り)をかけている時は、一時的な強い日差しでもハウス内温度がかなり上昇し、苗焼けを引き起こす場合があります。苗す。床土内部に温度計を設置し、緑化期までは床土温度が30℃を超えないように、ハウスを開閉するなどして温度管理します。また、新しい屋根ビニールは日光透過率が高くハウス内温度が上昇しやすいため、新調した方は外気温が低くてもハウス内温度(床土温度)には注意が必要です。

苗焼けに注意

春先からの高温によって、雑草の生育進度も早まる年があります。田植え期間が長期に渡る場合は「除草剤散布日」を必ず設定し、作業計画に組み込むようにしてください。

計画的な除草剤散布

初期剤、一発剤は水を介して拡散します。そのため、除草剤成分の拡散、処理層(除草剤成分の膜)の安定化など水管理は最重要です。下図を確認し、除草剤を効かせる環境づくりを行います。

水管理

初期剤、一発剤は水を介して拡散します。そのため、除草剤成分の拡散、処理層(除草剤成分の膜)の安定化など水管理は最重要です。下図を確認し、除草剤を効かせる環境づくりを行います。

散布のタイミング

初期剤、一発剤は雑草発生を抑える予防するという認識で使用しましょう。除草剤ラベルに記載されている雑草葉齢より、効果の振りは少なくなります。例えば「ノビエ3.0葉まで」と記載されているものについては、ノビエ2.0、2.5葉に散布します。雑草は田植え前最後の代かきから発生し始めます。田植え後、初期剤であれば3日以内、一発剤であれば10～14日には散布してください。

雑草対策

雑草が繁茂することで、イネと養水分の競合が起こり、収量に影響が出るだけでなく、斑点米カメムシ類をば場におびき寄せる原因にもなります。除草剤を上手に使用するためにも、散布前後のコツが必要です。

代かき後日数	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
雑草	ノビエ							1.0葉			1.5葉			2.0葉			2.5葉			3.0葉	
生育進度	ホタルイ														1.0葉			2.0葉			3.0葉
除草剤散布のタイミング	代かきと田植え、除草剤散布の間はできるだけ短くすること。				初期除草剤散布適期				一発除草剤散布適期												

除草剤成分流出防止し、安定した除草効果を得るために 除草剤散布後7日間は落水しない

散布時水深は深めがGood! 粒剤:5cm以上 その他拡散剤:7cm以上

除草剤散布後、3～4日間は入水も落水も行わない。

自然減水

除草剤散布後、7日間は落水しない。

差し水は散布後4日以降。除草剤処理層を壊さないようにゆっくりと行います。



- 水深確保** 一時的に苗が沈んでも良いので深水にして除草剤を散布。粒剤は5cm以上、その他は7cm程度の深水とする。降雨によるオーバーフローに注意。
- 差し水時期** 処理層が安定するまでは田面露出してもガマン! 散布後4日以降にゆっくりと差し水する。
- 漏水防止** 畦畔補修で漏水穴無くす。深水できる高さの畦畔を作る。散布前にもネズミ穴の再確認を。
- 田面均平** 田面高低差があると処理層が均一に形成されない。田面高低差の修正は丁寧な耕起・代かきです。

雑草多発ほ場は体系処理がキホン!

前年残草が多いほ場では、多種多数の雑草が長期間にわたって発芽、生育します。除草剤を効かせられる環境を作ったうえで、ダラダラ発生する雑草には「初期剤」+「一発剤」の体系処理をおこない、薬剤効果期間を伸ばしてやるのが基本です。場合によって「一発剤」+「一発剤」や「初期剤」+「中期剤」と状況に応じた組み合わせの検討も必要です。

初期剤	主にノビエ	ソルネット、エリジャン	+ 頼れる一発剤
	ノビエ、ホタルイ、オモダカ	ピラクロン、シヨキニー	

ベッカー、カバネZ、アツルZ



育苗期追肥の目安(箱当たり窒素g)

葉齢	稚苗	中苗
1.5葉期	1g	-
2.0葉期	-	1g
3.0葉期	-	1g

育苗期追肥資材例

資材名	現物量	窒素成分	水量
液肥2号	10ml/箱	1.0g	1,000ml/箱
サイコー12号	8g/箱	1.0g	-

※サイコー12号は散布後にかん水を行います。

田植えの1週間前に弁当肥として追肥を行います。苗が栄養不足状態で田植えをすると活着(発根)に時間がかかってしまい初期生育に影響します。田植え時期に低温や曇天が続くような場合は必ず追肥をしてやりませす。苗をよく観察して葉数や葉色に応じた追肥を行ってください。

育苗期追肥で素早い活着を

苗いもち防除薬剤

薬品名	ベンレート水和剤	ビームゾル
防除時期	播種時～播種14日後まで	緑化始期
使用基準	500倍液	500ml/箱
使用回数	1回	
備考	かん注	
タフブロック併用	×	○

※いずれも育苗箱への苗いもち防除は使用回数1回までです。※ビームゾルはWCSへの登録が無いため、ベンレートを 사용합니다。

いもち病菌は、乾燥状態の稲わらや粉殻に付着し越冬します。育苗ハウス周辺に潜んでいるいもち病菌が苗に移ることで発生を助長します。前年のワラや粉殻を育苗ハウス周辺から撤去するなど清掃を徹底し、種子消毒、育苗期防除を組み合わせて清潔な環境で作業を行い、本田持ち込みを阻止してください。WCSや飼料用米も必ず苗いもち防除をしてください。

苗いもち防除を確実に実施

もみ枯細菌病対策 まずは環境づくりから

- 厚播きはしない
- 出芽温度32℃を超えない
- 被覆期間を過剰に長くしない
- 出芽後の再被覆はしない
- 緑化期以降は25℃以上にならないようにする
- 過湿にしない

エコフィット適用作物と使用方法

作物名	希釈倍率	使用液量	散布時期	使用回数	使用方法
水稻	100倍	-	催芽時	1回	24時間浸種
水稻箱育苗	10倍	1箱当たり500ml	播種時		灌注
		1箱当たり50ml			散布

もみ枯細菌病対策は、薬剤対策と発病させない環境づくりが必要です。種子消毒はテクリードCフロアブルで行います。環境対策として、催芽・出芽温度は32℃を超えないようにするほか、高温過湿な環境にしないことが必要です。また、前年発生した場合、対策薬剤「エコフィット」を使用しましょう。※「エコフィット」は秋田県での特別栽培では農薬力ウントされますので、使用する際はご注意ください。

もみ枯細菌病対策

病名: ピシウム菌(別名:ムレ苗)

症状: 出芽後、地際が水浸状に褐変、急激にしおれ枯死、カビ発生無。

原因: 温度管理とかん水方法(急激な温度差、日中のかん水)。

対策: タチガレエースMかナエファインの使用、日中のかん水はくみ置き水を使用し温度差を解消。

病名: フザリウム菌

症状: 発芽直後～、根・地際部褐変、黄化枯死。地際部白又は紅色の粉状カビ。

原因: 過度の乾湿、昼間30℃以上夜間10℃以下の管理。

対策: タチガレエースMかナエファインの使用、温度管理、肥料切れ注意。

病名: リゾプス菌

症状: 種子層・床面に白いカビ。出芽・生育・根の発育不良。

原因: 過度の乾湿、出芽期間32℃以上の管理、育苗資材の不衛生。

対策: 育苗箱・出芽器の洗浄、施設清掃、播種時の水量確認。播種時ダコニール1000かダコレート水和剤、ナエファインの使用。出芽期間の温度管理。

病名: もみ枯細菌病

症状: 新葉基部と葉鞘部が白色～淡黄色→腐敗枯死、新葉は容易に抜ける。坪枯れ症状。

原因: 循環催芽で発生拡大、出芽温度が32℃以上、被覆資材の二度掛け、育苗資材の不衛生。

対策: エコフィットの使用、発生確認した場合、発病箱をハウス外へ隔離する。

育苗期における主な苗立枯病